

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 31日現在

機関番号：25201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23830057

研究課題名（和文） 遠距離介護の支援探求に関する社会学的考察

研究課題名（英文） Sociological examination of the support for long-distance caregivers

研究代表者

中川 敦 (NAKAGAWA ATSUSHI)

島根県立大学・総合政策学部・講師

研究者番号：30609904

研究成果の概要（和文）：これまで遠距離介護に関する社会学的研究の多くは、その当事者に調査の対象を限定した研究が中心であった。本研究は当事者に対する調査分析を深めつつ、その対象を遠距離介護の宛先である高齢者本人および彼ら彼女らを支える支援者にその対象を広げ、調査分析を行った。その結果、遠距離介護者はそばにいられないやましさを抱えていること、高齢者は死をも見据えた形で現状を受け入れていること、支援者は居住形態よりも関わりの内実から遠距離介護者を評価していることなどが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Previously, many sociological examinations about the long-distance caregiving has made only long distance caregiver the subject of their research. These researches have not had much attention about old parents and their professional supporter, so they have not got enough findings. This research expands the subject, and gets the new following findings. First, long distance caregivers feel guilty about not living together. Second, old parents presuppose their death and accept their situation. Third, the professional supporters estimate long distance caregiving from the viewpoint of not living arrangement but their content of involvements.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：遠距離介護、親子の同別居、施設入所、在宅生活

1. 研究開始当初の背景

近年、離れて暮らす高齢の親に健康・生活上の不安が生じた場合、親元へ頻繁に通い、介護を行う、いわゆる遠距離介護についての報告がなされている。ところが、遠距離介護についての実証的な学術研究は、日本ではこ

れまでほとんど存在しなかった。またわずかに存在する遠距離介護の研究も、もっぱら遠距離介護の当事者のみを対象とした調査によって得られた成果に限定されている。

近年の福祉／家族の社会学では、家族介護の経験を介護する側からのみ理解すること

への限界が強く指摘されている。それは家族の個人化・多様化のもと、家族内で認識の相違が拡大しており、特に老親介護では、家族成員同士の利害が衝突する可能性があるため、家族成員間の認識の相違が生み出されやすいからである。実際に海外では、複数の親族へのインタビュー調査によって家族責任が交渉の過程を通じて達成されるものであることを指摘する研究や、介護を巡る多面的な現実の構成を、複数の当事者の語りに注目することで明らかにしている研究などが存在する。

こうした指摘や知見は、遠距離介護の研究においても遠距離介護者に限定されない、複数の当事者に調査対象を拡張した研究の必要性を示唆するものである。

2. 研究の目的

本研究では、これまで、もっぱら遠距離介護者にのみ限定されていた遠距離介護の研究を、遠距離介護者に加えて、その相手方である要介護高齢者と、彼らを支援している福祉職者も含むことで深化・発展させる。

具体的には遠居の子供との同別居、要介護高齢者の在宅生活の継続か施設入所かの判断、という遠距離介護において最も重要な2つの問題に焦点化する。これらは、要介護高齢者の希望と遠居の子供の意思とが特に衝突しやすい、遠距離介護の当事者が最も悩み苦しむ事柄である。本研究ではまず、この2つの問題の考察を、研究代表者がこれまで行ってきた遠距離介護者の経験の再分析から深める。と同時に、これまで明らかにされてこなかった、もう一方の当事者である要介護高齢者自身が、この問題をどのように捉えているのかについて考察する。

さらに要介護高齢者の支援と遠居の子供との調整を担っている福祉職者が、遠距離介護者や子どもと離れて暮らす高齢者をどのように支援しているのかについても検討する。

3. 研究の方法

遠距離介護者、そして訪問介護サービスの提供を受けている在宅の高齢者、グループホーム、特別養護老人ホーム、養護老人ホームに入所中の高齢者、さらに高齢者を支援し、かつ遠距離介護者とのコミュニケーションも行う福祉の支援者に対して、インタビューを行った。

また、遠距離介護者と支援者の間で取り交わされるコミュニケーションそれ自体の参与観察、具体的には、地域包括支援センターが開催する地域ケア会議に同席しての参与観察も行った。

4. 研究成果

まず、遠距離介護者が、親を呼び寄せるか否か、あるいはUターンするか否かという同別居問題が、どのように浮上し、遠距離介護者がそこにどのような意味を付与しているのかについて検討した。

分析に際しては、遠距離介護者が老親との同別居の判断について、「動機の語彙論」的アプローチを採用した。分析によって得られた知見をまとめると、以下の通りである。

遠距離介護の動機は、遠距離介護という行為に対して直接提示されるというよりも、なぜ同居という形態をとらないのか、その理由の提示というかたちで、まずは示されるのであった。この背景の一つとして、親が要介護状態でありながら、Uターン同居を行わないことが、遠距離介護者に対して批難をとまなうものであるからだった。そしてそうした批難に対する〈弁解〉や〈正当化〉を行うために、Uターン同居が選択されない理由の提示が行われているのである。他方、呼び寄せ同居をしないこと理由は、まずは呼び寄せ自体が環境の変化によって、親の認知症を進行させることとして親のために〈正当化〉され、その上で呼び寄せ同居が、家族の負担を増加させるという子ども側の理由からも〈正当化〉されていくのであった。

さらに親の老い衰えの進行は、親の在宅での生活をも困難にしていく場合がある。このときに選択されるのが、施設入所であるが、そこでは、相矛盾する2つの感情に遠距離介護者は直面する。それは一方で、現在の親の生活を考えれば、在宅での生活を継続すれば、より大きな問題を生み出してしまうという感情である。それ故、親が在宅から施設へと移行した遠距離介護者は、大きな安堵感を手にするのである。

他方で、親を施設に入所させることには、遠距離介護者にとって強い抵抗感がある。少なくないケースで、高齢者は、長く住み慣れた家での生活を強く望んでいる。施設入所を選択することは、そうした親たちの希望を無にしてしまうことにもなる。事実、親の施設入所を選んだ子供たちの中には、安堵感と共に罪悪感を心の中に引きずりながら、定期的な通いを続けているものも少なくないのである。

このような、遠距離介護の当事者である子供たちの思いに対して、親はどのような認識を持っており、そのことは遠距離介護にどのような影響を与えているのであろうか。例を挙げよう。在宅で認知症の高齢の夫を介護している高齢の妻は、夜間1時間半～2時間おきにトイレに行く夫の排泄介助のためにほとんど眠ることはできないという。娘は介護をされている父だけではなく、介護をしている母の状態も心配であるため、2時間半をかけて県外から毎週末通っているのであった。

それでも平日は留守になるため、父は施設に入所してもらい、母は在宅で生活する方がよいのではないかと娘は考えるのだが、夫婦2人での在宅生活を望む母は、現状について、60年以上夫婦と一緒にいるから、全くストレスがない、と述べるのである。娘はこうした母の気持ちを理解し、現状で、父を施設に入所させることはあきらめている一方で、逆にそうした形で母が在宅での介護を頑張ることが、両親の急変に対応できない不安を、離れている娘に課す結果にもなってしまっているのであった。

つまり、在宅の高齢者は在宅生活に伴う困難に疲弊しながらもなお強い在宅志向を持っており、離れて暮らす子供たちはそうした親の気持ちを尊重するためにも遠距離介護を行っているのであった。しかしそのことは時に遠距離介護の負担感を増す場合もあることが指摘できるのであった。

特別養護老人ホームや、養護老人ホームなど施設に入所している高齢者の認識と、そのもとに通う遠距離介護者の関係はどのようなものであるか。施設の間人間関係に悩んでいたある高齢者は、離れて暮らす娘にその悩みを伝えると、娘は親に対して施設を出て、娘の家で同居することも提案したと言う。しかしその高齢者はそうした娘の同居の提案を断ったのであった。

その理由は嫁いだ娘の家に住むことは、他の家族への遠慮があり、また自分自身もそうした環境と人間関係になれるのに時間がかかるからというのである。そうした新たな環境への変化に比べれば、現在の施設の間人間関係について悩みがあったとしても、すでに慣れており、なによりも、もうすぐ死ぬことは分かっているのだから、残された時間の間だけ自分が我慢をする方が、子供に迷惑をかけるよりはましだと、高齢者は考えていたのであった。

そうした、消極的な理由だけではなく、施設に入所している高齢者には、施設の生活とはいえ、地域での生活に愛着があるのであった。より具体的には、小さな時から世話をしてくれ、「いつでも連絡を」と言ってくれる近くの寺に対する恩返しのためにも、遠くない時期に行われる自分の葬式を今いる地域で出さなければならぬという思いが、離れて暮らす娘のもとに移り住むのではなく、こちらにとどまるという気持ちを強くさせているのである。

以上からは、施設に入所している高齢者は、施設での生活の現状に不満があったとしても、自身の死をも見据えた形でそれを受け入れているのであり、同時にそうした思いの中で、離れて暮らす子供たちとの関係を形成しているものであった。

では、遠距離介護者に関わる専門職者は、

遠距離介護者をどのように見ており、支援を行っているのだろうか。あるグループホームの職員は、島根県で暮らす入居高齢者のために、月に一回の帰省を行っている大阪で暮らす娘について、その積極的な関わりを高く評価していた。他方で、同様に遠く離れて暮らしている別の入居者の娘が、ほとんど母のもとを訪れない状況について、特に、その入居高齢者が、他の家族の訪問をとてもうらやましがっていることから、その職員は心を痛めていた。そこで職員は離れて暮らす子供たちに、あえて衣替えなどの役割を作って、遠くからでありながらも訪問や関わりを促す工夫をしているのであった。

こうしたことは遠距離介護者に関わる専門職者は、必ずしも、家族が離れて暮らしているという居住形態のみから、家族の関わりを判断しているわけではなく（つまり、遠距離介護者に対して、一概に同居・近居すべきといった批判的な眼差しを向けているわけではなく）、離れて暮らしている状況の中でお、子供たちが老親とどのように関わっているかという、その内実をもって、離れて暮らしている子供たちを見つめているのだということが指摘できるのであった。

また遠距離介護者と支援者が実際に相談を行っている地域ケア会議の参与観察からは、支援者による遠距離介護者への関わりについて次のようなことが言える。すなわち支援者が、施設入所や同居ではなく、高齢者の在宅生活を可能にするための提案を行う際には、遠距離介護者自身の意向を尊重すべく、提案が受け入れられない可能性に非常に敏感な形で、つまり家族に対して支援者が無理強いしないように細心の注意が払われながらのコミュニケーションが行われているのであった。

今後の研究課題としては、現実に行われている、遠距離介護者、高齢者、支援者間のコミュニケーションの分析をより詳細な形で明らかにしていくことが必要であることが指摘された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計1件）

①中川敦(2012)「遠距離介護と同居問題——『なぜ?』はどのように語られるのか」三井さよ・鈴木智之編『ケアのリアリティ』法政大学出版局, 137-162.

〔その他〕

①中川敦(2011)「遠距離介護と同居問題」社会福祉法人ことぶき福祉会研修会招待講演.

②中川敦(2012)「遠距離介護者の経験とその背景——社会学の視点から」しまね小規模ケア連絡会研修会招待講演.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川 敦 (NAKAGAWA ATSUSHI)

島根県立大学・総合政策学部・講師

研究者番号：30609904